

2026年度

第1回一般入試

時間50分 100点満点

国語

受験上の注意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 実施時間は50分で、100点満点です。時間配分に注意して解答してください。
3. 解答は解答用紙にていねいに記入してください。
4. 解答用紙・問題用紙両方に、受験番号、座席番号、名前を記入してください。座席番号は、机に貼ってある番号のことです。
5. 試験中は携帯電話の電源を必ず切ってください。
6. 私語や物の貸し借りなどは認めていません。困ったことがある場合は、手をあげて先生に相談しその指示に従ってください。

受験番号 _____ 座席番号 _____

名 前 _____

聖学院中学校

【一】 次の①～⑤の（ ）に入ることをば語群から選び、漢字で答えなさい。

① 人としての価（ ）が問われる。

② 重要な証拠を（ ）供する。

③ 教えを（ ）実に守る。

④ 負けが必（ ）な戦況だ。

⑤ 主（ ）関係を持つ。

【語群】
シ
チ
テイ
ジュウ
チュウ

二

二〇二〇年、「新型コロナウイルス」と呼ばれる伝染病が世界中に蔓延したことは記憶に新しいところですが、今から一〇〇年前にも「ス。ペイン風邪」（日本名「流行性感冒」）というインフルエンザ種が世界的に流行し、多くの犠牲者が出ました。この作品は、その時代に書かれたものです。次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、漢字表記をひらがなに変えているところがあります）（「、」や「。」なども一字とします。）

去年の暮、胃腸をヒドク壊して、医者に見てもらったとき、その医者から、かなり烈しい幻滅を与えられてしまった。

医者は、自分の脈を触っていたが、

「オヤ脈がありませんね。こんなはずはないんだが。」と、「A」を傾けながら、何かを聞き入るようにした。医者が、そういうのも無理はなかった。自分の脈は、いつからということなしに、微弱になってしまっていた。自分でじつと長い間抑えていても、あるかなさかのごとく、ほのかに感ずるのに過ぎなかった。

医者は、自分の手を抑えたまま一分間もじつと黙っていた後、

「ああ、あることはありますがね。珍しく弱いですね。今まで、心臓について、医者に何かいわれたことはありませんか。」と、ちよつと真面目な表情をした。

「ありません。もつとも、二三年來医者に診てもらったこともありませんが。」と、自分は答えた。

医者は、黙って聴診器を、胸部に当てがった。Bちよつとそこに隠されている自分の生命の秘密を、嗅ぎ出されるかのように思われて気持が悪かった。

C 医者は、幾度も幾度も聴診器を当て直した。そして、心臓の周囲を、外からあますところのないように、探っていた。

「動悸どうきが高ぶった時にでも見なければ、充分じゅうぶんなことは分りませんが、どうも心臓の弁の併合へいごうが不完全なようです。」

「それは病気ですか。」と、自分はきいて見た。

「病気です。つまり心臓が欠けているのですから、もう継ぎ足すこともどうすることもできません。第一手術のできない所ですからね。」

「命にかかわるでしょうか。」自分は、オズオズきいてみた。

「いや、そうして生きていられるのですから、大事にさえ使えば、大丈夫だいじょうぶです。それに、心臓が少し右の方へ大きくなっているようです。あまり肥ふとるといけませんよ。脂肪心しぼうしんになると、ころりと衝心しょうしん（※1）してしまいますよ。」

医者いしゃのいうことは、一つとしてよいことはなかった。心臓の弱いことはかねて、覚悟かくごはしていたけれども、これほど弱いとまでは思わなかった。

「用心しなければいけませんよ。火事の時なんか、かけ出したりなんかするといけません。この間も、元町に火事があった時、水道橋で衝心を起して死んだ男がありましたよ。呼びに来たから、行って診察しんさつしましたがね。非常に心臓が弱いくせに家から十町ばかりもかけ続けたらしいのですよ。あなたなんかも、用心をしないと、いつ कोरोリと行くかも知れませんよ。第一喧嘩けんかなんかをして興奮こうふんしては駄目だめですよ。熱病も禁物きんぶつですね。チフスや流行性感冒りゅうこうかんぼうにかかって、四十度くらいの熱が三四日も続けばもう助かりっこはありませんね。」

この医者は、少しも気安めやごまかしをいわない医者だった。が、うそでもいいから、もっと気安めがいつて欲しかった。これほど、自分の心臓の危険が、露骨ろこつに述べられると、自分は一種味気ない気持がした。

「何か予防法とか養生法とかはありませんかね。」と、自分が最後の逃げ路にを求めると、

「ありません。ただ、脂肪類を喰わないことですね。肉類や脂っこい魚などは、なるべく避けるのですね。淡泊な野菜を喰うのですね。」

自分は「オヤオヤ。」と思った。D喰うことが、第一の楽しみといつてもよい自分には、こうした養生法は、致命的なものだった。

こうした診察を受けて以来、生命の安全が刻々に脅かされているような気がした。殊に、ちょうどその頃から、流行性感冒が猛烈な勢いではやりかけてきた。医者言葉に従えば、自分が流行性感冒にかかることは、すなわち死を意味していた。その上、そのころ新聞に頻々と載せられた感冒についての、医者の話の中などにも、心臓の強弱が、勝負の別れ目といったような、意味のことが、幾度も繰り返されていた。

自分は感冒に対して、脅え切ってしまったといつてもよかつた。自分はできるだけ予防したいと思った。最善の努力を払って、かからないように、しようと思った。他人から、臆病とわらわれようが、かかって死んではたまらないと思った。

自分は、極力外出しないようにした。妻も女中も、なるべく外出させないようにした。そして朝夕には過酸化水素水で、うがいをした。やむを得ない用事で、外出するときには、ガーゼをたくさん詰めたマスクを掛けた。そして、出る時と帰った時にていねいうがいをした。

それで、自分は万全を期した。が、来客のあるのは、仕方がなかつた。風邪がやっとなおったばかりで、まだ咳をしている人の、訪問を受けたときなどは、自分の心持が暗くなった。自分と話していた友人が、話している間に、段々熱が高くなったので、送り帰すと、その後から四十度の熱になったという報知を受けたときには、二三日は気味が悪かつた。

毎日の新聞に出る死者数の増減によって、自分は一喜一憂した。日ごとに増していつて、三千三百三十七人まで行くと、

それを最高の記録として、わずかばかりではあったが、だんだん減少し始めたときには、自分はホツとした。が、自重した。二月いっぱいほとんど、外出しなかった。友人はもとより、妻までが、自分の臆病を笑った。自分も少し神経衰弱の恐怖症にかかっていると思った。が、感冒に対する自分の恐怖は、どうにもまぎらすことのできない実感だった。

三月に、入ってから、寒さが一日一日と、引いて行くに従って、感冒の脅威もだんだん衰えて行つた。もうマスクをかけている人はほとんどなかった。が、自分はまだマスクをのけなかった。

「病気を怖れないで、伝染の危険を冒すなどと云うことは、それは野蛮人の勇氣だよ。病気を怖れて伝染の危険を絶対に避けるというほうが、文明人としての勇氣だよ。誰も、もうマスクをかけていないときに、マスクをかけているのは変なものだよ。が、それは臆病でなくして、E文明人としての勇氣だと思うよ。」

自分は、こんなことをいって友達に弁解した。また心の中でも、幾分かはそう信じていた。

三月の終頃まで、自分はマスクを捨てなかった。もう、流行性感冒は、都会の地を離れて、山間僻地へ行つたというような記事が、時々新聞に出た。が、自分はまだマスクを捨てなかった。もうほとんど誰も付けている人はなかった。が、たまに停留場で待ち合わしている乗客の中に、一人くらい黒い布きれで、鼻口を掩うている人を見出した。F自分は、非常に頼もしい気がした。ある種の同志であり、知己(※2)であるような気がした。自分は、そういう人を見つけ出すことに、自分一人マスクをつけているという、一種のてれくささから救われた。自分が、真の意味の衛生家であり、生命を極度に愛惜する点において一個の文明人であるといったような、誇をささえた。

四月となり、五月となった。さすがの自分も、もうマスクをつけなかった。ところが、四月から五月に移るころであった。また、流行性感冒が、ぶり返したという記事が二三の新聞に現われた。自分は、イヤになった。四月も五月もになって、まだ

充分に感冒の脅威から、ぬけ切れないということが、たまたまなく不愉快だった。

が、さすがの自分も、もうマスクをつける気はしなかった。日中は、初夏の太陽が、いっぱいポカポカと照らしている。どんな口実があるにしろ、マスクをつけられる義理ではなかった。新聞の記事が、心にかかりながら、時候の力が、自分を勇気づけてくれていた。

ちょうど五月の半ばであった。シカゴの野球団が来て、早稲田で仕合が、連日のように行われた。帝大の仕合がある日だった。自分もひさしぶりに、野球が見たい気になった。学生時代には、好球家の一人であった自分も、この一二年ほとんど見ていなかったのである。

その日は快晴といってもよいほど、よく晴れていた。青葉におおわれている目白台の高台が、見る目にさわやかだった。自分は、終点で電車を捨てると、裏道を運動場の方へ行った。この辺の地理はかなりよくわかっていた。自分が、ちょうど運動場の周囲の柵に沿うて、入場口の方へ急いでいたときだった。ふと、自分を追い越した二三四ばかりの青年があった。自分とはふと、その男の横顔を見た。見るとその男は思いがけなくも、黒いマスクをかけているのだった。自分はそれを見たときに、Gある不愉快なショックを受けずにはいられなかった。それと同時に、その男に明かな憎悪を感じた。その男が、なんとなく小憎らしかった。その黒く突き出ている黒いマスクから、いやな妖怪的な醜さをさえ感じた。

この男が、不快だった第一の原因は、こんなよい天気の日、この男によって、感冒の脅威を想起させられたことに違なかった。それと同時に、自分が、マスクをつけているときは、たまにマスクをつけている人に、逢うことが嬉しかったのに、自分がそれをつけなくなると、マスクをつけている人が、不快に見えるという自己本位的な心持も交っていた。が、そうした心持よりも、更にこんなことを感じた。自分がある男を、不快に思ったのは、強者に対する弱者の反感ではなかったか。あん

なに、マスクをつけることに、熱心だった自分までが、時候の手前、それをつけることが、どうにも気恥きはずかしくなっている時に、勇敢ゆうかんに傲然ごうぜん（※3）とマスクをつけて、数千の人々の集まっている所へ、押し出おして行く態度は、かなり徹底てつていした強者の態度ではあるまいか。とにかく自分が世間や時候の手前、やりかねていることを、この青年は勇敢ゆうかんにやっているのだと思った。この男を不快に感じたのは、この男のそうした勇氣あつぱくに、圧迫あつぱくされた心持ではないかと自分は思った。

〔菊池寛『マスク』〕

- ※1 衝心……………呼吸が困難になること。
- ※2 知己……………自分がよく知っている人。親友。
- ※3 傲然……………堂々としているさま。

問一 空欄Aを補うのにふさわしい言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 顔 イ 頭 ウ 首 エ 肩

問二 傍線部Bについて、「ちょうどそこに隠されている自分の生命の秘密を、嗅ぎ出されるかのように思われて気持が悪かった」とありますが、これはどのような心理を指しますか。もっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「脈がない」と言われているにも関わらず、自分が医者と話している不思議な状態について気味悪さを感じた。

イ 脈が弱いことは自覚しているが、それ以上の身体の異変が見つかるかもしれないということに不安を感じた。

ウ 「二三年来医者に診てもらったこともない」という返事が不自然であることを知られてしまうのではないかと恐れた。

エ 医者者の深刻な表情に不安を抱き、それが自分の動悸や心音をさらに激しくさせてしまうのではないかと心配した。

問三 傍線部Cについて、この医者ほどのような人物として描かれていきますか。次の中から選び、記号で答えなさい。

ア しっかり診察することなく、自分の考えを一方的に押し付ける荒っぽい医者。

イ ろくに会話をすることもなく、早く診察を終わらせようとするせっかちな医者。

ウ 豊富な経験をもとにわかりやすい例を上げて、治療の方法を解説する親切な医者。

エ 愛想があるとは言えないが、ていねいに診察し、言うべきことははっきり言う医者。

問四 傍線部Dについて、「喰うことが、第一の楽しみといってもよい自分には、こうした養生法は、致命的なものだった」

からわかる「私」の心情の説明としてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 酒を飲まない代わりに食することが楽しみであった自分にとって、この医者のおすすめは、とても同意できるものではない。
かった。

イ 何の制限も受けずに好きなものを食べることがいちばんの楽しみであった自分にとって、この医者のおすすめは逃げ場を失うものであった。

ウ 好きなものを食べるために働いてきた自分にとって、医者の話は厳しいものであったが、したがうことで健康になりた
いと考えた。

エ 野菜嫌いで肉ばかり食べていた自分にとって、この医者のおすすめは残酷なものであり、とても受け入れられるものでは
なかった。

問五 傍線部Eについて、「文明人としての勇氣」の説明としてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 物事を慎重に考えることが文明人の知的な姿勢であることから、一時の減少に油断しない姿勢を見せること。

イ 自分の中で感冒に対する恐怖が消えない以上、心配のし過ぎと笑われても、あらゆる手段を講じて対策を取ること。
死亡者数の増減に応じて対策の度合いを変化させ、次に来るであろう増加を見越して事前に対策を講じること。

エ 新聞の情報に踊らされることなく、自分で考えて予想を立て、その信念を貫くことで、後悔のない日々を送ること。

問六 傍線部F「自分は、非常に頼もしい気がした」と傍線部G「ある不愉快なショックを受けずにはいられなかった」は、どちらも「鼻や口を覆っている他人」を見た時の「自分」の心理ですが、なぜこのような大きな変化が起きたのかを説明しなさい。

問七 今から一〇〇年以上前に流行した「スペイン風邪」と、二〇二〇年に流行した「新型コロナウイルス」について、このような状況を受け止める人間の心理にはどのような共通点がありますか。本文の内容をふまえた上で、もっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間は、その時々^{ごとき}の集団におけるルールやマナーを守らない人に対し、攻撃したり、排除したりすることがあるという点。

イ 人間は、無意識のうちに多数派の目を気にして、それに合わせて自分の行動基準^{きじゆん}を決めてしまうことがあるという点。

ウ 人間は、集団が過^こしややすい環境を優先させるために自分の欲望を表に出さず、協調性を重んじることがあるという点。

エ 人間は、悪い結果が出るとそれに関わる人物をどこまでも追及し、だれが悪いのかを確定させたがる傾向^{けいこう}があるという点。

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（「、」や「。」なども一字とします。）

僕は、みなさんと同じ十五歳か十六歳の頃、詩を書きはじめました。友達とガリ版で詩集をつくったりしてね。

書いたからって「こう読め」とか「こう思え」と人に強制することはできません。そう考えると、書いたものを誰かが読むというのは偶然と偶然が会うことなんですね。偶然と偶然が会って「あなたのいつていることはすごくよくわかるよ」と共感してもらえるかどうかは、ほんとに、はかない希望です。A僕は、そういうはかない希望でもってものを書きはじめて、いつの間にか物書きが仕事になっていました。

詩や文学は好きでしたが、高校は工業高等学校に通って化学の勉強をしていましたから、戦争というものがなかったら、きっとそのまま技術者になっていたと思います。書くことは、いいことがうまく伝えられない自分の慰めのために始めたことでした。それが仕事になってるなんて、今でも不思議な気がします。

みなさんも、ために自分が思ったことを紙に書くというのをやってみるといいですよ。

別に誰に見せるわけでもないんだから、きちんと書かなくていいんです。Bへんにかまえる必要もないし、好き勝手にわけのわからんことを書いてみるといい。

そうすると、〈話し言葉〉と〈書き言葉〉っていうのはまるでちがうものだということが、きっとよくわかると思います。

ふだんはまったく意識してないと思うけれど、書くことと、話して相手にそれを通じさせようとすることはまったく別のことなんですよ。〈書き言葉〉っていうのは、何か得体の知れないところがある。書いてみると、自分でも気がついていなかった自分自身の気持ちが変わることがあるし、それをもっと深く掘り下げていくこともできる。〈話し言葉〉が相手に何かを伝

えるための道具だとしたら、〈書き言葉〉は自分の心の中に降りていくための道具だといってもいい。

今の学校は、どうも〈話し言葉〉を重視している気がします。意思の疎通そつうのための言葉、人と議論するための言葉、コミュニケーションのための言葉の大切さは教わるみたいだけど、〈書き言葉〉については、単純に作文を書くってくらいしか教わらないんじゃないですか。そのせいで、かえって書くことが苦手になっちゃったという人もいるんじゃないかなあ。

僕は話すことに苦手意識があるので、アナウンサーみたいによどみなくしゃべる人には憧あこがれがあります。だけど、すらすらとしゃべることができるといって、全部が伝わるとはどうてい思えないんですね。流暢りゅうちやうにしゃべることができるとは自分がいったことが相手にどんなふうに伝わるかに案外無頓着むとんちやくだったりして、Cこりやあ、危あこがなつかしいなあと思うことがけっこうあります。どんなにしゃべるのがうまい人でも、伝えきれないものはどうしたってあるはずですよ。

樹でいったら、地面の上に見えている枝葉じゃなくって、根っこねの部分が言葉にもあるんですよ。地面の下の見えてない部分ぶぶんがね。

たとえば、人には誰にもいえない気持ちだってありますよね。心の中で思っていることだから、いいことばかりじゃない。悪いことだって考える。僕はこれを〈個人幻想げんそう〉と呼んでいきます。

みなさんくらいの年頃だと好きな人ができたりもするでしょう。漠然ぼくぜんとした異性への憧れの先には、その人と恋人こいびとになりたいたい、その人と家族になりたいという思いがある。僕はこれをペアの幻想、〈対幻想〉と呼んでいます。思春期というのは、そんなふうな〈ひとり〉から〈ふたり〉にスイッチが入る時期なんですね。性の目覚めっていいんですけど、肉体的なことと精神せいしん的なことがいっぺんにやってくるんだから大変なものです。

好きな人ができると、自分とその人の共通点が気になったりもするでしょう。あるいは家族に対して、親はああいうけど、

自分はちがうんだよなつてことが出てきたりする。〈個人幻想〉と〈対幻想〉は一致するところもあるけど、食いちがうところもあるわけです。

つまり、あなたが「自分はひとりだな」と思うようになったのは、自分以外の誰かを意識するようになったからともいえる。人と比べて自分はどこがどう同じで、どちらがうのかをいろいろと考えるようになって、自分のことがだんだん見えてきたからでもある。

だとしたら、相手にうまく伝わらない、誰ともわかちあえないその気持ちこそが〈自分〉じゃないですか。自分でもわけがわからない、もやもやしたその気持ちの中にこそ、D自分自身をもっと深く知るための手がかりが潜んでいる。書くことは、それを掘り起こすための方法でもあるんですよ。

将来について考えるようになれば、視野はさらに広がっていきます。〈学校〉も集団だし、〈社会〉とか〈国家〉も集団といえば、集団ですよ。同じような考えをした人が集まって集団をつくっている。僕はこれを〈共同幻想〉と呼んでいるんだけど、みんなが思い描いていることと、自分が思っていることは必ずしも一致するとは限らない。これは子どもも大人も一緒です。

大人だって、やっぱり「自分はひとりだな」と思いながら生きてるんですよ。でもそれはふだんは地面の下で見えていない、根っこの部分なんです。

その人が本当は何を考えているのかっていうのは、その機会が回ってこなければ、なかなか積極的に表に出てくるものでもないですよ。ふとした拍子にその人の本領がわかって、ハッとさせられるということがあります。

それで思い出すのが、僕が小学校の時のなまけものの先生のことです。

その先生はろくに授業もしないし、適当に生徒を指名しては「この土地の名産品について、今日はおまえがしゃべってみろ」なんていう。呼び出されてそばに行くと、お酒のにおいがしたりして「うへえっ、昨日も一杯やったな」ってわかつちやう。普通の常識からいったら、いいところなんてまるでない人なんです。

当時、子どもたちの間ではベイゴマが流行っていました。自分のコマで相手のコマを弾き飛ばして勝った方がそれをもらっちゃう。ちよつと賭け事みたいなどころがあったし、子どもたちがあまりにベイゴマに夢中になったので、学校では禁止されちゃったんです。見つかったらしかられる。それでも僕らはやるわけ。ときどきそういうことでもしないと解放感がないもんだから、悪いことだつて知つてて、先生たちの目を盗んではまたやる。

見つかったら、当然しかられるわけですよ。朝礼で「昨日、ベイゴマをやったヤツは前に出る！」っていわれて、しようがないからぞろぞろつと出ていくと、こつびどくお説教されてね。ひっぱたかれたり、げんこつをくらったりした。

そうしたらある時、そのなまけものの先生がどうしたか。

張り切つてお説教している先生に向かって、校庭のいちばん後ろの方から大きい声で「きこえませーん!」、怒鳴つたんです。

その時に、僕は初めてこのなまけものの先生の本心、この人の「E」がわかった気がした。僕らが呼び出されてはしかられたり、ひっぱたかれたりしているのをなまけものの先生はあんまりいい感じで見えていなかったんでしょね。黙っていたけど。そんなに頭ごなしにしからなくなつていいじゃねえかと思つていたのかもしれない。それでお説教がきこえないはずはないのに「きこえませーん!」って怒鳴つた。F僕らは僕らなりにそれでハツとしたわけです。

もちろんお説教する先生が悪いわけじゃないですよ。それはその先生なりの正義感ではあるわけです。でも正しいこと、も

つともらしいことをいわれても、腹の底では納得していないことがある。その時の「きこえませーん！」は、そんな僕ら自身の口には出せない本心でもあったから、なまけものの先生がそう叫んだ時、どんなお説教より心に響いたんだと思います。僕はすっかりその先生が大好きになって、小学校を卒業して上の学校に行ってから、その先生にだけは挨拶に行つたのを覚えています。

〔吉本隆明『15歳の寺子屋 ひとり』〕

問一 傍線部Aぼうせんぶについて、「僕は、そういうはかない希望でもつてもを書きはじめて、いつの間にか物書きが仕事になっていました」からわかることは何ですか。次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が書いたものについてか共感してくれる読者が現れるはずだという期待を、今でも持ち続けているということ。

イ 自分が書いたものに共感してくれる読者との出会いがかなわないまま、あきらめてしまうことは無念だということ。

ウ 自分が書いたもので人を感動させるだけの説得力のある文章を書く技量を身に付けてきた自信があるということ。

エ 自分が書いたものに偶然、共感してくれる読者との出会いを重ねた経験を重ねて、書く仕事を続けられたということ。

問二 傍線部Bについて、「へんにかまえる必要もないし、好き勝手にわけのわからんことを書いてみるといい」の説明としてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が思ったことを自分のために書くのだから、文章の構成や言葉の用い方など細かいことは気にせず、自分のその時の内面を、思いのままに書き記せばいいということ。

イ 文章の書き方は次第に身に着ければいいことなのだから、まずは、自分の喜びや怒り、悲しみといった感情を、文字だけでなく絵や記号なども使って書き記せばいいということ。

ウ 相手にうまく伝えるためには、かしまつて固く考えるのではなく、その時々
の正直な自分の思いを、わかりやすいやさしい表現を使いながら書き記せばいいということ。

エ 誰かに見せるわけではないので期限を気にすることなく、じっくり時間をかけた上で自分の考えをまとめて、それを簡単な言葉で書き記せばいいということ。

問三 傍線部C「こりゃあ、危なっかしいなあと思うことがけっこうあります」について、どのような点が「危なっかしい」のですか。次の中から選び、記号で答えなさい。

ア すらすらとしゃべる人の話は聞きやすいが、本人が思っているほど相手の心に響いておらず、そのことに本人が気づいていない点。

イ すらすらとしゃべる人の話が、本当に言いたいことを伝えきれていなかったり、時として誤解ごかいを招く危険性ふくを含んでいたりする点。

ウ すらすらとしゃべる人の話は自信に満ちており堂々と見えるが、その見かけの印象が強い分、話の内容が相手に伝わりにくい点。

エ すらすらとしゃべる人の話が聞き手を引き込むことはあるが、その内容が正確か否かは、話し方とは別の問題であるという点。

問四 傍線部D「自分自身をもっと深く知るための手がかり」とありますが、「自分」が作られる過程を筆者はどのように考えていますか。次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 心の中に思っていることを自分の中で適切な言葉に置き換え、自分と相手の共通点と違いを認識することを通して、将来的に集団の中に入っていくための準備ができ、そうした他者との心理的距離をつかむ努力が「自分」を作っていくという事。

イ 時には悪いことを考えてしまう自分をも受け入れ、誰かを好きになることを通して自分と他者との違いを知るようになり、その違いをどうやって埋めていこうかと試行錯誤を重ねることによって、「自分」が作られていくということ。

ウ 心の中で思っていることを正直に受け入れた後、異性を好きになることで、どうすればもっと人間として魅力的な存在になれるかを考える機会を増やすことを通して、他者にかげがえのない存在としての「自分」が作られていくということ。

エ 自分がひとりであることを認識するのは他者を意識するようになったからであり、その間に生じる違いを、違いとして認識し、もやもやした世界の中で自分が何者であるのかを考え続ける行為自体が、「自分」を作ることにはほかならないということ。

問五 空欄Eに入る言葉としてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 幻想 イ 本領 ウ 常識 エ 意識

問六 傍線部Fについて、「僕らは僕らなりにそれでハツとしたわけです」とありますが、何に「ハツとした」のですか。次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ふだんはなまけものの先生だが、この時には、他の先生の長い説教や暴力に対して抗議の意思を示す強さを持っていたこと。

イ ふだんはなまけものの先生だが、説教の音が後ろからは聞き取りにくいという事実を指摘する真面目さを持っていたこと。

ウ ふだんはなまけものの先生だが、説教が長引いて授業開始が遅れることには明確に反対の意思を示す迫力を持っていたこと。

エ ふだんはなまけものの先生だが、ベイゴマ程度で怒り出す他の教員の大人げなさにあきれて生徒の側に立ってくれたこと。

問七 あなたは〈書き言葉〉を身につけるために、「学校の作文」以外にどのような方法が有効だと考えますか。方法と、それが有効である理由を簡潔に説明しなさい。

受験番号		座席番号		名前	
------	--	------	--	----	--

※

二									
問七	問六				問五	問四	問三	問二	問一

一	
③	①
④	②
⑤	

三							
問七		問六	問五	問四	問三	問二	問一
		理由	方法				

※	一
※	二
※	三